



ここ数年、記憶力の衰えを実感しております私は、認知症がじわじわと忍び寄ってくるような、不安な思いであります。でも認知症になんでも、にこにこと明るく過ごしていらっしゃる方もいらっしゃいます。そんな明るい認知症だったら…いいなあ。そう、明るい認知症をテーマにした物語を書いてみたい！というのが、この物語の動機でした。書き出したら空想はどんどん膨らみ、天使と悪魔のやりとりと、二人の高齢女性のやりとりを、俯瞰して表現したくなりました。果たして、元気が出る物語に仕上がったでしょうか？

\* \* \* \* \*

## 幸せな忘却

大野和子

典子は若いころから、ひどい方向音痴だった。車を運転してはよく道に迷った。そして最近は人の名前が思い出せない。思い出せないのは苦しい。ため息が出来る。それでもなんとかして思い出そうとする。そうする事は、認知症に怯えている自分には必須なことだと思っていた。

「あの人の名前は…えーと、えーと…はーだめだ。よし、あ、い、う、え、お。違うなあ。か、き、く、け、こ。違う！さ、し、す、せ、そ…そう、杉山さんだ！」

こんな具合に、時には五分ぐらい時間をかけて、必死に思い出そうとした。うまく正解にたどり着けると、心底ほっとした。どうあがいても思い出せない時は、ただただ悲しくなった。

典子の母は現在九六才。周りの人に気遣いのできる、明るく頑張り屋の母だったのに、一五年ほど前から徐々に物忘れがひどくなってきた。家族との会話にも加わらず、ぼんやりと聞いているだけになってしまった。心配になった典子は妹と一緒に、母を脳神経外科に連れて行った。その結果、アルツハイマー型認知症と診断されたのだ。薬は処方されたが、あくまでも進行を遅らせることしかできず、回復は見込めないとの事だった。優しかった母がふさぎ込み、いらいらと怒りっぽくなっていた。典子は悲しかった。母から笑顔を消し去った認知症を心底憎んだ。そして今、不安に襲われている。二カ月前に七五才になった自分も、認知症に向かっているのではないかと。

三月になって、千恵子から電話があった。千恵子は、横浜の高校の同僚だった。数学の教師で頭の回転が速く、思いやりがあり、生徒からも慕われていた。典子より三才年上で、互いの家族の話をするうちに親しくなった。一緒に国内外の旅行にも何度か行った。三五年來の親友だから、どんな事も遠慮なく話せる相手だ。典子は母の認知症のこと、自身も忘れっぽくなつて不安なことを話した。千恵子は黙って聞いてくれた。そして言った。

「私も同じよ。ほんと、人や物の名前が出なくなっちゃたわ。ね、聞いて。ショックなことがあったの。先週、町内会の役員仲間で夜回りするのを、すっかり忘

れちゃってね。それだけじゃないの。夜回りのあと、私が具合悪くて来れなかったのかもと、心配した奥さんが来てくれて…それでその時私、うっかり忘れた事を謝って、家にあった林檎を渡したそうなんだね…」

千恵子は小さく息を吐いた。そして続けた。

「それから一週間ほど経って、その奥さんに道で会ったの。そして林檎のお礼を言われたのよ。だけどね…私、自分が林檎を渡した事、全然覚えてなかったの。ほんとショックだった…」

「ああ、そんなことがあったの…」

「それでね、認知症になっちゃったのかもと心配になつて…それからネットで脳神経外科を探して、検査をしてもらったのよ。」

「えーさすが千恵子。行動が早いわ。それで結果は？」

「脳のMRIを撮って、そのあと口頭で記憶力の問診検査をしたの。で、結果は異常なしだった。医師に言われたわ。『多少、体調が悪かったのかもしれませんね』って」

「ああ良かった！」

典子は自分のことのように嬉しかった。そして思ったのだ。自分も脳神経外科に行って、検査をしてもらおうと。

典子や千恵子たちが住む地球星から、三万六千キロメートル離れた大気圏。そこに、たくさんの人工衛星が浮かんでいた。人工衛星は地球から送信された電波を受信すると、今度は人工衛星から、電波を地上に送信していた。こうした人工衛星のお陰で、地球の隅々まで電波が届き、情報が届くようになったのだ。人工衛星の大きさは、一辺十センチほどの小さな物から、数十メートル四方の物まであって、形も、円筒形から球体の物まで様々だった。

ある日の事だ。人工衛星の円筒形の胴体に、二つの生命体のようなものがまたがっていた。地球人とはまったく異なる姿かたちで、一体は全身が白い姿で、肩に二つの大きな羽根。それに優しい眼差し…どうやら

天使のようだ。別の一體は黒い姿に、黒い大きな羽根に、血走った目。こちらは悪魔のようだ。彼らは地球を指差しながら、口論をしていた。

「ほれ見たことか！人間たちの寿命を延ばしたのは、きみの仕業だぞ、天使君！」

「そのとおりさ、悪魔君。私が地球人たちにプレゼントした長い寿命のお陰で、人間たちは高度な文明を築けたのさ！長い年月をかけて、素晴らしい知能を発達させた人間たち…彼らが生み出した、あの機械や道具、パソコンやロボットを見たまえ！そしてさらには、これらのさまざまな人工衛星…ここまで見事な世界を築き上げるとは…私の予想をはるかに超える、素晴らしい結果となった」

すると悪魔はヒヒヒと笑った。そし地球を指差しながら、軋むような声で言った。

「ところがだな、あの人間達は我々と違って、年を取るに従い、体力も気力も、認知機能も衰えていくのさ。それが宿命のようだ。ほれ、見てごらんよ。あっちでもこっちでも…徐々に記憶力を失い、いつ果てるかもしれない命の灯を抱いて、人間たちがよろよろ迷っているぞ。地球星は、そんな老人で溢れているのさ。ほら！みんな一様に、ぼんやりした目をしおって…まっここと、長寿とは哀れなもんだな。さてさて、天使君、君はこの現状にどう対処するというのかい？」

天使も拡大機能の付いた眼で、地球星をじっと見つめた。そして深いため息をついた。

「人間たちは知恵を磨き、たゆまぬ努力で、あれほど高度な文明を築いたというのに…実に快適な生活環境を手に入れたのに…」



天使の青い瞳から、真珠のような涙がぽろりと落ちた。それでも天使はきっぱりと顔を上げて、こう言った。

「はい、はい、悪魔君の言う通り！進化と進歩の結果、人間たちは欲深くなつたようだ。もっと楽しみたい。もっとラクをしたい、もっと他の人より認められたい、もっと健康で長生きをしたい…とね」

「そうとも、天使君。人間たちは長生きした結果、どうなったか？何度も言ってやるぞ！体が衰え、記憶力は加速的に剥がれ落ち、認知症になるのさ。そしてどんどん落ち込んで、鬱状態になるのさ。はあ…哀れなこつた…やれやれ」

悪魔は天使を小ばかにするように、とがった指先を天使に向けて振りながら、なおも続けた。

「まだまだ言わせてもらうぞ。人間たちが快適な環境を求める結果、どうなった？石油や石炭など、地中深くに眠っていた資源をどんどん掘り起こし、燃料として消費していったのさ。そして地球は二酸化炭素の

濃い霧に覆われてしまったのさ。その結果、住みにくく、自然災害の多発する、暑い暑い星になつてしましましたとさ。あちゃ～」

悪魔はますます調子に乗って、体をくねらせ、歌うように言うのだった。

「それでも人間は、もっともっとと呟いて、何でもかんでも欲しがって、互いの国土を奪い合う。はてはてどこまで業界張りなのやら、人間は」

「もう結構！わかったから、悪魔君、それ以上言うな！」

天使は固く目をつぶり、言った。

「俺が思うに、人間には、長い寿命はふさわしくないのだ。せめて上限五十才の寿命なら、心身の衰えに悪戦苦闘する人間は、もっと少ないはずだ。記憶の衰えに嘆く人間も、ほんのわずかなはずさ」

悪魔がその醜い顔をゆがめてヒヒヒと笑い、さらに言った。

「天使君、結局のところ、君が苦労してセッティングした長寿の仕組みは、人間たちにとってはマイナス効果だったのさ」

天使はうなだれて、手の平をじっと見つめた。それから目を地球星の方に向けた。青い地球は昔と変わらず美しく、キラキラ輝いていた。

「それでも何かまだ…私にできる事が…あるかもしれない」

天使はハーとため息をついた。その時、天使の眼が地球星のある地点に注がれた。

地球星の典子と千恵子は、温泉の露天風呂に浸かりながら、木漏れ日を浴びていた。

「ああ…気持ちいいなあ」

「こんな近くに天然温泉ができる、ほんとありがたいわあ！」

「指の霜焼けも治るわね、きっと！」

「そうよ。温泉は霜焼けばかりじゃなく、心にも効くわよ、きっと」

千恵子は両手をお湯の中でこすり合わせ、それから胸に当てた。

「あーこんな愉しみ、年をとったからこそよね！」

典子が両手足を思いっきり伸ばしながら、言った。

「そうそう。お互い、若い時は学校と育児と家事で、息つく暇も無かったわよね」

「ほんと。私ね、後期高齢者になって、記憶力は衰えるし、体のあちこちに不調が出てきたし、いいことないなって思ったの。けれどいいことあるじゃない！これからもまだまだ、あるのよ、きっと！捜さなければ見つからない、ってわけよね！」

「うん、そういうこと！これから私達、もっともっと人生楽しもうね！」

その時だった。桜の花びらがはらりと落ちて、大きな水輪を作った。

「ね、思ったの。そう遠からず、私もある世に行くとは思うけど…そしたらね、あの世で、夫とまた暮らしたいなあって」

「へーそうなんだ。私は…どうかなあ？」

千恵子が、ゆらゆら浮かんでいる河津桜の方へ手を伸ばしながら言った。

「ね、ほんと不思議なの。夫が生きていた間は喧嘩ばかりしていて、別れたいとさえ思ったのにね。亡くなつてから、嫌なことはすっかり忘れてしまったみたいなの。変でしょう？優しくて誠実で、家族思いの夫しか思い出さないのよ」

「ふーん、不思議ねえ。年を取るって、体や頭の不調だけじゃないのね。まずいことは忘れてしまうなんて…ほんと、人間ってうまい具合にできてるのね」

木漏れ日を見上げながら、千恵子が言った。

「でね、思ったの。忘れるって事は一つまり年を取るってことは、いいこともあるんだなって。ね、そんなわけで、私の人生、二重丸よ。間違いなく幸せだったのよ。心からそう思うの。そして、今のこの瞬間も幸せでーす！」

振り上げた両手をひらひらさせて、典子が言った。

「良かったあ。いつのまにか典子は、認知症恐怖症を克服したのね！」「ああ、そうかも」

「きっと、そうよ！お互い、これから何年生きるか分からぬけれど、明るく考えていれば、自分も周りも

ハッピーだしね」

遠い宇宙の片隅では、天使と悪魔が、典子と千恵子のやり取りを聞いていた。

「ああ…年を取るのも悪くないと…そう来たか」

悪魔が悔しそうにつぶやいた。

「残念だな、悪魔くん。結局のところ、善は悪に勝つことになっているんだよ。人間は不完全で、迷いも過ちも多い。けれど、我々ができる事は、今後も人間の善なるものを信じ、祈るしかないとことさ。我々の不必要な手出しは今後も無用、ってことだな」

その時だった。宇宙の深い闇の中を、一つの小さな星が、煌めきながらサーと動いた。

「おっ、流れ星だ！よし！我々にも、何かいいことがありそうだよ、悪魔君！」

悪魔がニンマリ笑った。そして南の方角に、その尖った毛むくじらの人差し指を向けた。

「天使君、知ってるかい？最近、あの小惑星にも温泉ができたらしいよ。地球の温泉を参考に作ったそうだ。でな…あの二人を見てたら、俺も露天風呂に入りたくなつたよ。で、どうだい？これから一緒に行ってみないかい？」

「そりやあいいな！行こう、行こう！でもその毛むくじらの体を、よく洗ってから、温泉に入れよ」

「分かった、分かった」

典子と千恵子は露天風呂につかりながら、青い空を仰いでいた。すると空のどこかで、バシャバシャと水の跳ねる音を聞いた気がした。それは何とも心地いい、生き生きとした水音だった。



## We Jokers 第 108 号

英語のジョークを楽しむ会

(Joke-Loving Club) 会報

発行日：2025 年 11 月 15 日

発行人：世話人代表 豊田一男

編集人：小澤正樹

発行元：英語のジョークを楽しむ会

問い合わせ先： j2d4vhb7@na.commufa.jp